
THE WRITER OF THE WORLD

ボブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE WRITER OF THE WORLD

N4850M

【作者名】

ボブ

【あらすじ】

藍染惣右介率いるアランカルとの決戦は死神側の勝利に終わる。だが、それは始まりでも終わりでもなかった。一護達の新たな戦いが今始まる。

序章（前書き）

初投稿です。至らぬ点があると思いますが、生温かい目でみても
いられると思いますがたいです。

雨が降っている。

そこは本当に何も無い平原であった。
しかし、人ならずもの目でみればそこはただの平原ではなく、
悲惨な戦場跡であった。

地面一面に広がる、屍の山と大量の血痕は、その場の空氣を否応なく重くしていた。
そしてそんな悲惨な戦場に数人の男女が立っていた。彼らは靈子へと帰つていく黒い着物と刀をもつたそれらを一言も発さずただ見ていた。

その内一人また一人とその戦場から去つていく。

最後に残つたのは一人の青年と、手と服と黒い髪を血で真つ赤に染めた一人の子供であった。

「わたしは今日の、そして今までの記憶をこの雨とともに忘れる。」
そのこどもは誰にいうともなしにつぶやく。

青年はだまつてそれを聞いていた。

「だけど、けつして失くさない。絶対に思い出す。それがわたしに
とっても貴様にとつてもいいかどうかはともかく。・・・だから」
そしてそのこどもは青年の目をしっかりと見据え宣言する。

「だから、それまではさよならだ。・・・とうさん。」

その言葉を言った直後、青年がそのこどもの前に手をかざすとそのこどもはグラリと身を倒す。気を失つたそのこどもを支えながら、青年はそのこどもの身に何かを埋め込み、ポツリと呟く。

「ええ、またあいましょう。そしてそれまでは、願わくばよい夢を・
・ルキア」

それは過ぎ去った過去の記憶。誰にも忘れられてしまった。知られてはいけない記憶の残滓。しかし雨とともに流れたその記憶はけつして消えずに漂い続ける。・・・雨は未だに降り続いているのだから。

1話 戦の後日談（前書き）

捏造設定、また今後の話からオリジナルキャラが数出てきます。注意してください。

1話 戦の後日談

井上織姫の拉致から始まる藍染惣右介率いる破面との決戦は端的に言えば死神側の勝利に終わる。主犯の藍染惣右介が文字通りちりも残さず消滅し、その他のエスパー・ダ等の幹部達も大半が死亡。残つたものたちも逃走したのだから。

とはいっても、問題が全て片付いた訳ではもちろん無い。

逃亡したアランカルの対策以外にも、裏切った死神の内死亡が確認された、藍染惣右介・東仙要以外の最後の一人。本物の空座町を舞台にした最終決戦のさなかに行方をくらませた、市丸ギンについても考慮しなくてはならない。

そうでなくとも、隊長格の大半が負傷し、ソウル・ソサエティにはろくな戦力が残つていなかつた。さらにプラスして、通常業務や大量の事務処理。そして個々の精神的なキズ、問題といった一次的な問題はじょじょに死神達を疲弊させていった。

戦争は終わつた。しかし問題はやまざみである。

そしてそれは、この戦争の中心となつた、オレンジの髪の死神代行にも、そして最終決戦において最終的に藍染惣右介に手を下した黒髪の死神にとつても同じであつた。

護る力が欲しかつた。他の何に比べても。

「オウラアー起きろ一護。モーニングビーロカイブーニングだ。コノヤロー。」

人形に話かける。それは、ある意味ではほほえましい光景である。ただそれはT P Oがあつてゐる場合に限つており、この場で繰り広げられるライオン人形とオレンジの髪の一見するとヤンキーにしか

見えない男との舌戦は傍田からみたら不気味を通り越していくソシユールである。

オレンジ髪の男の名は黒崎一護。死神代行である。

「うつせーなコソ。たまの土日くらい休ませろよ。疲れてるんだよ、俺は。一田中なーんもしなくていいおまえとちがつてな。」

その言葉に対し、コソとよばれたライオン人形はピヨンっと一護が寝転がっているベッドの上に飛び降り、その落下スピードそのままに一護の頭にけりをくらわす。

「おふつ」

「なんだとー。てめえ、おれがてめえの妹のせいだけスリングな日常送つてると思つて・・・じゃねえ。それはどうでもいい。いやよくないけど。てめえわいつか帰つてきてから鬱オーラ全開でうつとーしーんだよ。」

秋なのにこの部屋だけじめつてんだよ。となおもコソは抗議する。「うつせーな。俺にもいろいろあるんだよ。いろいろ。」

「いわいろつてなんだ。ネエさんもいねえし、じかとラストレスたまりまくりなんだよ！」

「知るか。ルキアはソウルソサエティに帰つたんだよ。」

そういうて一護はコソをむんずとつかむとそのまま壁に投げ捨てる。

バヌツという効果音とともに壁にもろにぶつけたコソはそれでもめげずにグルミ権侵害で訴えるぞコノヤロー。となおも騒いでる。

「もうお兄ちゃんうるさい。何一人でもまた騒いでるの？」

ガチャつというドアの音とともに一護の妹の遊子が部屋に入つてくる。と・同時に先ほどまであれほど騒いでいたコソは一気にフリーズする。

「あれつ。ボスタフ（＝コソのこと）またおにじちゃんの部屋にいる。」

「あーなんかまぎれこんでた。ちょうどいいから連れてかえつてくれ。」

ふーん。と首をかしげながら、遊子は「ンをつかむ。一護は「ンの声にならない悲鳴を聞いた気がしたが、スルーする。

遊子と「ンがいなくなつて静かになつた部屋で、一護はベッドに再び寝転がる。

わかつてゐる。と一護は思つた。自分があの藍染との決戦以来沈んでいることも。そしてあれほどまでに「ンが騒いでるのは、そうやつて沈んでいる自分を今この場にいない相棒の代わりになんとかしようとしてのことなのも。全部わかつてゐる。

「でも、どうしようもねえじゃねえか。」

一護はだれにいふでもなく呟く。

現在一護を悩ませてゐる問題の大半は自分でどうしようもないことであつた。それは父親が死神であつたことであつたり、実は自分は観察という名目でずっと監視されていたことであつたり、出会いと戦いがその観察者（＝藍染惣右介）の作為によるものであるならば、自分の今までの人生はなんだつたのか・というかなりアインデンティティが崩される事実であつたり。そして・・・自分は結局護れなかつたといふどうしようもなくつきつけられた現実だつた。

最終決戦、自分はできるかぎりのことはした。その事には間違はない。だが、藍染はそうした自分の努力も、手に入れた力も全て計算の内にいれており、結局自分ができたのは藍染惣右介から崩玉を引き剥がすアシストをしたことだけであつた。

崩玉を実際引き剥がしたのは、浦原さんで、
崩玉を元の姿に戻したのは、井上で、

その元の姿というのはルキアの一靈力 ちから で、

藍染を倒したのは、それによつて靈圧が飛躍的に向上したルキアだつた。

空座町は護られた。自分の友人たちも、家族も、戦友たちも。だが、それを行つたのが自分ではないということが、悔しくて、そう思つ自分が惨めであつた。

ソウルソサエティ 潤靈廷 栄木家にて

はあー。と朽木家の縁側で朽木ルキアは盛大に溜息を吐く。空は晴天。体調も万全。しかし気分は全く晴れない。

「なにやつてんだルキア。休んでろよ。」

ふすまをスパツと開けて、赤髪で大柄な死神が部屋に入つてきて、ズンズンとルキアに向かつて歩いてくる。

「たわけ、怪我などどうの昔に癒えた。それより恋次、貴様こんなところで何をしている。まだ勤務中のはずだろ？」「いぶかしりながらルキアは話かけてきた死神・阿散井恋次に目をやる。「まさか貴様・・・さぼりか。」

「ちげえよ、馬鹿。・・・つうか隊長の家でさぼりつてどんだけだよ。任務だ任務。テメーの監視が俺の仕事。」

それを聞いてルキアは思わず頭をかかえる。「今度は貴様か。」

ソウルソサエティに戻つてきて数週間、本来なら通常の隊務に戻つているはずだが、ルキアは朽木家にて監視つきの謹慎を命じられていた。

命令はわかる。藍染惣右介との決戦で崩玉が元々自分の靈力であるということがわかつた。だがいくら自分の靈力とはいえ、急激に上昇した靈力には通常靈体は耐え切れない。人手が圧倒的に足りない今、暴発する危険性のある人間にうろつうされるのは困るということなのだろう。しかし謹慎は分かるが、なぜ監視つきなのか？しかもその監視は、技術開発局の変人どもや、刑軍の連中によつて日毎に入れ替わり立ち替わりで行われ、自分がモルモットか犯罪者にでもなつた気分である。

しかも、やつとその監視が消えたかと思つたら、次の監視は本当なら激務に追われる兄の副官である恋次だ。ただでさえ考え事が多いのに、自分のせいで兄の仕事の負担が増えると思うと頭も抱えるくなるといつものだ。

頭を抱えて深く溜息をつく幼馴染をみて、恋次はまた、ぐだんねえことで悩んでんな。と苦笑する。

技術開発局や刑軍によるルキアの監視は靈力の暴走を危惧してと いうよりルキアの存在そのものを危惧しているというウエイトの方が高い。誰も倒すことができなかつた藍染惣右介を圧倒的な力で倒した存在。それは反逆者を倒した英雄というよりもなにか、えたいの知れない存在であつた。実際、決戦後ルキアを初めてみたとき恋次は無事だつた。という安堵感よりもルキアから発する壯絶な靈圧に対する恐怖感の方が先に立つた。

だけどいくら靈圧があがろつと、コイツはかわんねえ。そのことに若干安堵しながら、恋次は口を開く。

「いつとくけどな、俺にお前の監視を命じたのは隊長だからな。」

「兄様が？」

ルキアの顔にははつきりと一体なぜと書いてある。

それを見て恋次はあの鉄面皮の隊長の顔を思い出しながら話す。

「いつまでもよそ者、しかも十一番隊や一番隊の連中に邸内をうろうろされるのは不愉快だつてさ。なんだつけ、ほらあの現世でいう・ そうプライバシーの侵害だ。つってさ。それなら監視は自分の隊からだすつて言つて。俺がここに来たつーことだ。」「なるほど。まさかそれほどまで兄様が不愉快にかんじられていたとは・・・本当に申し訳ない。」

そういうつてシウンとなるルキアを横目に見ながら、まあそれは表向きの理由だがな。と心の中で呟く。

そもそも朽木家は普段からその家柄故使用人含め多数の人間が行き来している。よそ者うんぬんの話にしたつて、朽木家が女性死神

協会のアジトといつかむしろ巣となつてうろついていたが邸内を我が物顔でのさばつてゐる現状では説得力があまり無い。

実際は義妹の心労を減らす為と義妹の身を守るためという既に滌靈廷中に知れ渡つてゐるシスコン魂によつて、ありとあらゆる方法で他隊の監視をとりやめたのが真相である。他隊への根回しに始まり、技術開発局への金銭的支援という名の賄賂。隠密機動総司令官へは、昔撮られた夜一のレア写真の贈呈。更に現在の山元総隊長が臥せつてゐることにより混乱している指揮系統を利用してのござ押し。と・ありとあらゆるコネと権力を使つたこの朽木隊長の行動のせいでのこに来るまでの途中他の隊長格に冷めたを通りこしてすぐ生温かい視線を送られてしまつた。

「で・お前はまたなにに悩んでんだ?」

縁側で使用人の持つてきた茶をすすりながら恋次はルキアに聞く。それに対しても眉をよせたルキアは「何も悩んでおらぬ。」とそつぽを向く。

「嘘つけ。」じやあわつきの盛大な溜息は何なんだよ・と言いたいそもそも自分が今日ここに来たのも朽木隊長が「監視を追い払つたのに、ルキアの顔が晴れない。恋次貴様どうにかして理由を聞き出していく。」と自分に命じたからだ。

そこまでわかつてゐるなら自分で聞き出せよ。とも思つが、自分もルキアのことが気になつてたから、休憩もかねて監視の仕事を受けた。そしたら盛大な溜息を吐くルキアに直面したということだ。「悩みというか、正直色々ありすぎて混乱してるという方が正しいかな。」

さつきまで眉をよせながら何かを考えていた風のルキアはポツリと呟く。

「うん?話してみろよ。人に話している内に整理がつくつてこともあるぜ。」

まあそりやそうだな。と思いながら恋次は茶菓子の団子をつかみ

ながら言つ。

意を決したようにルキアは「まず一つ目に……崩玉についてだ。」と話しだす。

「崩玉が私の靈力を使って作られたということは理解した。実際、井上の双天帰盾で私にその靈力が戻ったのだし、それは確かだろ。……だがそれでは不自然なことがある。崩玉はいつ作られ、いつ私に封印されたのだ？」

「どうゆうことだ。」

「つまり何というか浦原達が滝靈廷というかソウルソサエティを追われたのは101年前だろう。そしてその時には崩玉は完成していた。」

「ああ、確かに報告書ではそう出てたな。だが何か不思議か？戌吊で俺達に会うまで、それこそ赤ん坊のころにでもお前が浦原さんに会つてたんじやねえの。」そういうつて恋次はパクリと茶菓子の団子を食べる。

「うむ。確かに作られた時期はたいして問題は無い。私にお前と会う以前で浦原に会つたような記憶は一切無いがそれも赤ん坊のころに作られその後捨てられたのだとしたら矛盾は無くなるしな。」だが・トルキアは続ける「問題は封印された時期だ。101年前に奴は現世に追いやられその後はずつとそのままだ。そして私は少なくとも101年前にはソウルソサエティにいた。……つまり封印する機会などあるわけないのだ。そんな記憶もないしな。」

そう言ってトルキアはお茶をグイっと飲む。

一つ目からハードな悩みだな。と恋次は思いながら一番ありそうな事実を思い出す。

「ルキア。それはあれじやねえの、一護に初めて会つた時浦原さんが現れていろいろ世話をしてくれたんだろ。その時どさくさに紛れて封印したんじやねえの。」

「私も最初はそう思つた。だがな藍染が言つてたのだが、そのそもその一護との出会いも私が崩玉を持っていたから起こつた自分の

計画だと。・・・つまり一護に会う以前に私に崩玉は封印されたということだ。」

それを聞いて恋次は答えに詰まる。「だけど藍染だぜ。あの人真顔で嘘つくるだろ。」と一番忘れてはいけない事実を思い出しフォローする。だが確かに不自然な点が多いのも確かだ。

「まあそう言わればそうなのだが・・・。」そういうつてルキアは団子に手を伸ばす。

「ま・結局のところは浦原さんに聞くしかないか。」

「そうなのだが。・・・自宅謹慎が命じられているし、それに特に現世へいくことは禁止されているからな。」一護たちのことも気になるのだが、ヒルキアは呟く。

まあな。と恋次も苦い顔をする。確かに決戦直後の一護の様子はおかしかつたし、井上達の様子も気になるのだろう。

「まあもう少し情勢が落ち着いたら、現世にも行けるぞ。でルキア一つ困てことはまだあんのか？」できれば次はもつとソフトな問題にしてほしい。

「うむ。実は次の問題については解消してくれそうな人物に心当たりはあるのだ。だから恋次外出許可をくれ。」

「はあお前自宅謹慎の意味わかってんのかよ。」恋次は思わず聞き返す。

「わかつてある。耳元で騒ぐな。だから許可をくれといつてあるのだ。」別にいくのは瀧靈廷内だし、監視を止めるとは言つてない。と続ける。

しばらくうーんとうなつていた恋次だが、これを断つてルキアが余計に沈んでしまつたりすればそれこそ某シスコン兄貴によつて殺される可能性がある。

それになにかあっても自分がなんとかすればいいかと思い。

「よし、わかつた。ただし俺も付いていくからな。どこに行くんだ

「 本当か、ありがとう恋次！行くのはな・・・ 鍛冶屋だ。
そういうて笑った。 ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4850m/>

THE WRITER OF THE WORLD

2010年10月8日10時58分発行